コラム
COLUMN

ガンバル 我ら 地域おこし協力隊 No.38

大都市圏から地方へ人の流れを作り、将来の定住を目指しながら、地方の活性化への貢献を目指すプログラム「地域おこし協力隊」。彼らの日々の活動を紹介します。
【問】市商工・ブランド振興課（☎77・8722）

〝柳川の味〟をPR 今度は柳川へおいでめせ

柳川の空気感まで伝わるような月光舎の「水都柳川ものがたり」

ノース天神での「おいでめせ柳川特産市」

小田急百貨店では自慢の柳川産海苔を販売

こんにちは。地域おこし協力隊の上田です。

昨年に引き続き、4月は東京新宿の小田急百貨店、7月は横浜上大岡の京急百貨店と、関東圏へ柳川特産品のPR・販売に行ってきました。柳川産の海苔（のり）や名物うなぎのせいろ蒸し、醤油に味噌。うれしいことに、お気に入りの商品目当てに何度も足を運んでくださるお客様もいました。少しずつですが、着実に柳川ファンが増えていることを感じる今日この頃です。

今春から、百貨店での販売の他にもいろいろな機会をいただいています。6月には天神の商業施設、ノース天神のイベントスペースで「おいでめせ柳川特産市」を企画。「柳川の人たちと一緒に商品PRをしたい」と思っていた念願がかない、三橋町の女性農業者グループ〝まかせな菜（さい）・みつはし〟の皆さんや福岡有明海漁連さんに協力いただいて、朝採りの新鮮野菜やおいしい海苔、柳川ブランド認定品の販売を行うことができました。元気な柳川のお母さんたちの声掛けで、山積みの野菜がみるみる売れていく様子はもう本当にお見事！ 2日間限りでしたが、たくさんのお客様とお話もでき、楽しい時間となりました。

また、東京で働いていたときのご縁で、新しい地域での販売も実現しました。東京目黒区の雑貨店、月光舎で、柳川の特産品を集めた企画展「水都柳川ものがたり」を開催していただき、海苔はもちろん、お菓子やジャム、調味料からイ草製品まで置いていただきました。月光舎は住宅地の中の小さなお店ですが、定期的に各地の物産なども取り扱うこだわりのお店です。この辺りの地域にはアンテナショップなどもなく、福岡、中でも柳川の商品が置かれることは稀（まれ）なため、珍しい品々はとても喜ばれたそうです。

私は今回、東京のお店と柳川の事業者の方々とをつなぐ役割でしたが、柳川の味や文化に触れていただく機会をつくれたことをうれしく思います。小さな取り組みの積み重ねですが、これからも一人でもたくさんの方に柳川に訪れてもらい、現地の味や文化、魅力を知っていただきたいです。

上田 恵佳（あやか）（31歳）

【プロフィル】東京都目黒区から移住。大学で環境・都市デザインを学び、まちづくり専門員として目黒区の活動を支援していた。平成28年5月から市地域おこし協力隊として市商工・ブランド振興課に所属

柳川にこの人あり vol.74

NPO法人日本ソーシャルスクール協会
理事長
濱川 一宏（かずひろ）さん
新船津町・43歳

自分で考え創造できる子どもや社会の実現を

子どもたちの論理的思考力や課題解決力を育てようと、総務省が昨年度公募した、「プログラミング教育実施モデル実証事業」に、濱川さんが理事長を務めるNPO法人日本ソーシャルスクール協会の企画が採択。6月から同協会が主催するプログラミング講座が柳河小学校で実施されました。

関西育ちの濱川さん。人一倍独立心が強く、中学を卒業すると親元を離れて働き始め、17歳から5年間、知人の紹介で東南アジアなど海外での仕事を経験。その間、建築や飲食店、電気関係など、職業を転々とします。帰国後は、関東でインターネット関係の仕事に従事。15年前に奥さんと知り合い、結婚を機に、電機店を営む奥さんの実家、柳川へやってきます。

これまで紆余曲折の人生を歩んできた濱川さんが常に感じていたことは、学校教育と現実のギャップ。「社会が大きく変わり始めている今、いい学校を卒業し、いい企業に就職しても、いい人生が待っているとは限らない。もっと子どもたちが主体的に何をしたいのか考え、どうしたらいいのかを創造する力を身につける必要がある」と濱川さんは考えるようになります。

2年前にNPO法人を立ち上げた濱川さんは、「プログラミング教育は、創造力を育てる1つの手法。これからも、子どもや地域の大人が一緒になって、子どもたちが考え創造していける社会づくりのためのお手伝いをしていきたい」と話しました（関連記事5ページ）。

プログラミング講座での濱川さん

川柳

今月の入選作品・課題「釘」「雑詠」

さりげなく諭す優しい母の釘

佐藤良子（蒲生）

振り返ってみるといつもそうだった。母としての愛情を押し付けることもなく、毎日あたり前のように用意されていた弁当箱一つ。泣いた訳も、荒れた訳も聞かず、みんな弁当箱と一緒に大きな母という風呂敷に包んでくれた。「釘」に広がる頑固な父、亡き夫、友の声。川柳を考えることは身近な人を考えることである。

流青

まだ抜けぬ頑固な父が打った釘　吉開綾子（筑紫町）
釘打って掛ける帽子の派手なこと　田中眞智子（西浜武）
被災地に忙しくこだまぐずる釘　山田美代子（下宮永町）
亡き夫の門松の釘残しまま　荒巻ミエノ（南浜武）
棟梁の口に出番の光る釘　江口和子（今古賀）
安保理の釘も及ばぬ北の国　内村美子（七ツ家）
手探りの人生掛けた釘も錆び　坂田信幸（鷹ノ尾）
台風に耐えた雨戸の釘は錆び　佐田輝喜（明野）
一代を守り続けた曲がり釘　徳永孑ツ子（徳益）
五寸釘腕たくましく叩き込む　黒田和代（吉富町）
胸の釘抜いてくれたは友の声　古賀治美（南浜武）
永田町不思議発見釘隠し　井上勝世士（豊原）
約束の釘がさっぱり効かぬ釘　津留和巳（六合）
船釘を丹精込めて打つ鍛冶屋　甲斐田園一（吉富町）
本物の出過ぎた釘は打たれまい　古賀幸子（横山町）
何故曲がった釘に理由を聞いてみる　鶴岡定子（茂庵町）
心にね釘がささって泣いてるよ　木下実優（みゆう）（柳河小6年）
忘れない思い出にだけくぎをさす　永島寧乃（やすの）（柳河小6年）
釘を打つトントントンとリズム打つ　堤 愛都（まなと）（柳河小6年）

川柳を募集しています。選句者は梅崎流青さん。10月の課題は**「並ぶ」「雑詠」**。入選作品は11月1日号に掲載します。

●**応募方法** 川柳と明記し、自作、未発表の作品（**※1人3句以内**）に、住所、氏名、電話番号を書いて、ハガキかファクスまたは直接、柳川庁舎企画課広報広聴係（☎77・8425、FAX74・5520）へ、**10月15日（必着）**までにお送りください。

悔いということばが並ぶ日記閉じ　流青